

『わかりあえないことから— コミュニケーション能力とは何か』 平田オリザ著、
講談社現代新書、2012年10月、740円+

●コミュニケーション能力は、単なる大人慣れ？

コミュニケーション能力って何？ 我々大学教員も無意識のうちに使っている。平田に言わせると、それは「大人（年長者）とのつきあいに慣れている」程度のことなのだという。だから「いま、中堅大学では、就職に強い学生は二つのタイプしかないとされている。一つは体育会系の学生、もう一つはアルバイトをたくさん経験してきた学生」となる。

この二つに当てはまらないからといってがっかりする必要はない。能力とか人格ではなく、慣れの問題なのだ。

この延長線上に「大人からいじられる力」がある。どのクラスにも一人くらいいるだろう。気の利いたことを言い、決して授業の邪魔をしない。組織からありがたがられる存在なのだ。この手の学生が皆無だと大変授業がやりにくい。天性の何かが必要な気がする。我々教員は、この意味でコミュニケーション能力を使っていると思う。

●自己紹介と皆に聞こえる声

平田は、コミュニケーション能力の基本として、「きちんと自己紹介ができる、必要に応じて大きな声が出せる」を挙げる。小中高でやっておくべきことはこれくらいだと言うのだが、これができない大学生が意外に多い。

授業中、教員から「え？」と聞き返された経験がある人は、要注意である。身に覚えがある人は、そこからまず鍛えよう。声がよく通る人、はっきり話す人は面接では当然受けが良い。かつてうちのゼミで、内定を取りまくった学生が数人いたが、皆、この点では優等生だった。

●工業立国からサービス業立国になった日本

サービス業とは、工業、農業、漁業、林業以外の仕事のことだ。これが多いのは当たり前前だと思うかもしれないが、昔の日本はもっと工場で働く人が多かった。

平田はこの社会の変化への対応の必要性を指摘する。「サービス業中心の社会では、自分にあつた職業を見つけるのに、大変時間がかかる。そしてそれを見つけるためには、インターンシップなど様々な職業体験を保障し、トライアル・アンド・エラーの繰り返しを許す環境が必要となる」。

バイトは金儲けだけのためのものではない。インターンは好きな仕事を体験するためだけにしているのではない。自分に合う仕事を見つけるためのものだ、と考えよう。

●単語しか喋らない大学生

今の大学生の多くは、主語・述語を使わず、単語一語で答える。本学英米語学科だけではない。自分が非常勤講師で教えている武蔵大学の経済学部の学生もそうだ。自分は、これを極力やめるよう指導している。

「おまえがウザイからだ」と言われればそうなのだろうが、世間や社会はもっとウザイ。平田は言う。「言語は、言わなくても済むことは、言わないように変化する。・・・単語でしか喋れないのではない。必要がないから喋らないのだ。喋れないのなら能力の低下だが、喋らないのは意欲の低下の問題だ」。

●脱温室のすすめ

どうしてこういう学生が増えたのか。平田はこう説明している。

「いまは少子化で優しいお母さんなら、子どもが「ケーキ」と言えば、すぐにケーキを出してしまう。あるいは、もっと優しいお母さんなら子どもの気持ちを察して「ケーキ」と言う前にケーキを出してしまうかもしれない。・・・学校でも、優しい先生が、子どもたちの気持ちを察して指導を行う。クラスの中でも、いじめを受けるのはもちろん、する方だっていやなので、衝突を回避して、気の合った小さな仲間同士でしか喋らない、行動しない。こうして、わかりあう、察し合う、温室のようなコミュニケーションが続いていく」。

家庭、教室が温室なら、就職活動は冷蔵庫に飛び込むに等しい。

この極端な温度差に順応するためには、就職活動第一歩の会社説明会から単独で参加することを薦めている。友人といると温室の温もりが残ってしまう。企業側からの見えもよくない。

●良書とは

最後に良書を選ぶコツを紹介しよう。平田は日本を代表する戯曲作家だ。本書では、芝居以外についての魅力的な言及が、そこそこにある。一流の専門家が専門分野についてではなく、関連分野、あるいはまったく関連の無い分野について語っている本は、鋭い指摘に満ちている。「買い」だ。

(英米語学科長)

『わかりあえないことからー コミュニケーション能力とは何か』平田オリザ
講談社現代新書、2012年10月、740円+

※次回は英米語学科4年生が薦める自己啓発本の紹介です。